

「人間教育」と心の教育

— 道徳教育の充実をめざして —

Education for Human Growth and Education of the Mind

— Moral Education for fostering the Mind which appreciates Lives —

広島県西部教育事務所芸北支所

新川 靖

SHINKAWA Yasushi

Hiroshima Prefectural Board of Education

Western Office Geihoku Branch

キーワード：道徳教育，命の尊重，体験活動，道徳の時間，学習プログラム

Abstract： Systematic and intentional instruction which is cooperated with the moral education class and the moral education performed by all the educational activities is required for substantial moral education. Therefore, we performed the learning program of the morality which was associated with each subject, the especially established experiential activities and the morality on the theme of respect of a life. As a result, a better change was seen to many pupils. In order to heighten the effect of moral education more, it can be said that various educational activities are related with specific moral value and it is effective to program a flow.

Keyword： Moral Education, Respect for a Life, Experiential Activity, Moral Education Class, Learning Program

1. はじめに

平成20年3月改訂の小学校学習指導要領では、「生きる力」とは、「知・徳・体のバランスの取れた力」とされている。学校教育において、児童のよりよい成長を目指す教育を進めていくためには、学力や体力とともに豊かな人間性を育成するための心の教育を充実させていかななくてはならない。

学校教育の中で、心の教育を担うのは道徳教育である。道徳教育について、小学校学習指導要領では以下のように示されている。「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うもので

あり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特徴に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」⁽¹⁾

つまり道徳教育は、道徳の時間だけで行われるのではなく、各教科等も含めた学校の全教育活動において行われなくてはならない。ここで求められているのは、児童の発達の段階に応じて系統的に設定されている道徳の内容項目をもとにした意図的な指導である。しかし、各教科等の指導と比べ、道徳教育では、道徳の内容項目が示されているにもかかわらず系統的・意図的に指導が進められているとは言いがたいのが現状である。道徳

教育を道徳の時間を含む全教育活動で系統的・意図的に進めていくためには、次の3つの課題について考えていく必要がある。

(1) 道徳教育を全教育活動で系統的・意図的に行っていくことへの指導者の意識の不十分さがある

道徳教育とは、道徳の時間と全教育活動で行う道徳教育を指すのは前述の通りであるが、教師が道徳教育として意識するのは「道徳の時間」であることが多い。その結果、学校の全教育活動で行う道徳教育が、意図的・系統的に実施されるものとなり得ていない。

各教科等において設定されている学習の内容は、系統的に整理され、年間指導計画に基づいて授業されている。同様に、道徳の時間は、道徳の内容項目に基づいて作成された年間指導計画に基づいて授業がされる。一方、他の教育活動において、教師は、児童の望ましくない言動については振り返らせ、望ましい言動には称賛を与えるなどして、日常的に道徳性の育成に努めているものの、どの場面で、どの内容項目について、道徳教育に関わる指導を行うのかについては、道徳の時間と比べ明確に設定されているわけではない。

(2) 児童の道徳性を的確に評価することは簡単ではない

各教科等の授業では、本時の目標に対し評価規準が設定されている。これによって、教師は、その時間における児童の学びは本時の目標を達成するものであったかを評価する。この評価は授業の改善と児童の成長の把握につながる。また、評価問題によるテストが実施され学習内容の定着を把握することができる。

しかし、道徳教育の評価は難しい。道徳の時間においては、目標ではなく「ねらい」と設定され、児童の変容についての方向性が示されていることが多い。評価規準を明確に示すことができないのは、1時間の授業の中の児童の発言や記述だけで、児童の道徳性について、授業者が目標として設定する規準に達しているかどうかを評価することが困難であるからである。また、道徳性は、全ての児童がこれまでの生活経験に基づいて持っており、道徳性は、道徳の時間の場面だけではなく、生活の中での習慣や行為にあらわれてくる。道徳の時間の児童の様子だけで道徳性がどのように向上しているかを評価することは難しい。道徳性の発達を評価するには児童の生活全体に目を向ける必要がある。

(3) 道徳的な価値を知っていることと道徳性が高まっ

ていることが同じではない

「廊下を走ることは自他にとって危険だ。ルールを守ることが大切だ。」ということ教師が指導した後の休み時間に、運動場で遊ぶために廊下を走って外へ出ていってしまう児童がいる。児童は「廊下を走ってはいけない」ということは教師の指導を通して知っていたはずである。つまり、道徳的な価値を知っていれば、道徳的实践につながっていくとは言えないのである。

また、廊下を走らずに、グラウンドに出たものの、遊具に関するルールを守らない児童もいる。こういった児童は、「ルールを守ることとは、ろうかを走らないこと」と捉えており、ルールを守れることをその他の場面で適用していないのである。

これらのようなケースは、さまざまな道徳的な価値について見られる。道徳的な価値を知らせるのではなく、道徳の時間を中心に道徳的な価値について考えさせ、さらに全教育活動を通して生活の中に適用できる道徳的实践にしていくためには、道徳的な価値についての全教育活動を関連付けた指導者による意図的な指導が必要である。

そこで、道徳教育を道徳の時間を含む全教育活動で系統的・意図的に進めていくためには、これらの課題を克服しながら、道徳の時間とそれ以外の教育活動を連携した指導を行っていく必要がある。このような問題意識から「命を大切にすることを育てること」をねらいとした第6学年の道徳教育について自身の実践をもとに述べていきたい。

2. 命を大切にすることを育てる道徳教育の構成はどのようなものか

(1) 「命を大切にすること」ということとは

この実践における「命を大切にすること」ということについて定義をする。本実践における「命を大切にすることは、自他の命の尊さを実感し、自らの命をよりよく生きる」ということである。

まず、児童が自他の生命の尊さを実感している必要がある。そのためには、体験活動を行い、身の回りにある自然に触れ、「命のありよう」を感じる大切である。前述のように、道徳的な価値に関する知識は、知っていることだけでは十分ではない。「命は大切だ」「命は1つしかない」といったことを知っている第6学年の児童は多い。しかし、実感を伴ったものとなっている

とは言い難い。例えば、「たんぽぽの根」は力強く地面にしっかりと根を伸ばしていることを知っている児童は多い。しかし、地中深くまで伸び、手では掘り起こすことが難しいたんぽぽの根の柔らかさに触れたことがある児童は少ない。その生命力の素晴らしさを感じようと思えば、たんぽぽの根に沿って、そっと掘り起こしてみる必要がある。また「生物には、1つとして同じものはない」のだということは知っていても、植物の葉は同じように見える。だが、目を凝らしてみると同じように見える葉脈も葉の大きさも色も違っている。「同じではないのだから当然だ。」ということが分かっている、児童は何枚もの葉を比べてそのことを確認していく。このような体験による「命そのもの」への実感が根底に必要となってくる。

次に、体験を振り返ることによって、命の性質について考えることである。この体験の経験化によって「命のありよう」が実感をともなった理解として児童の中に蓄積される。「命とは何か」という実感を伴った理解によってこそ、「命を尊ぶ」という心構えが育つのである。そして、「自らの命をよりよく生きる」ということに向けて、発達段階に応じて「生き方」について考える。「夢と生き方」を取り挙げ、「よりよい生き方」を考え、実践に移していくことが、命を大切に生きることの1つであると設定するからである。

(2) 命を大切にすることを育てる学習のプログラム化

命のありようについて感じる体験とその経験化のプロセスを教育活動の中に取り入れるにあたっては、道徳の時間と体験活動等も含めた各教科等との連携を重視して行く必要がある。そこで、次の点を工夫しながら道徳の時間と他の教育活動を連携させてプログラム化していくこととした。

①二つの視点をもったプログラムの作成

この実践における「命を大切にすること」という点は前述の通りである。命のありようについて体験活動を通して学ぶという段階と、自らの命をよりよく生きるという段階である。そこで、学習をプログラム化するにあたり、①「命のありようを実感・理解した上で、その尊さを感じる（ライフ）」②「自らの生き方を考える（キャリア）」という2つの視点を持ったプログラムを作成し、実施することとした。

②プログラムの中に意識の変容の4つの段階を設定する
プログラムを実施していく中での児童の意識の変容

を4つの段階に分けて設定した。「ふれる段階」「気づく段階」「深める段階」「創る段階」の4つの段階である。(表1)

各段階で、道徳の時間や各教科等の活動を関連付けた指導によって生まれる子どもの意識を具体的に想定し、目指す子ども像に向けた児童の意識の変容を段階的に目指すこととした。

③命についての体験活動の時間（ライフタイム）を特設する。

プログラム化にあたり、各教科等の活動だけではなく、じっくりと命について考える学習を行うために特設の時間を設定し、命のありようについて感じる体験活動を実施することとした。

④児童の変容を見取るための評価の設定

表1 道徳学習プログラムの児童の意識の各段階⁽²⁾

段階	子どもの意識の具体例	指導上の留意点	
ふれる	◎学校生活や体験活動を通して道徳的価値にふれる。 (子どもはその価値に気がつかなくてよい。)	◎生き物とるのは楽しいね。 ◎たくさん生き物があるんだね。	様々な活動の中で価値を作っていくにつながる活動や体験を指導者が意識しておく。
気づく	◎道徳の授業や体験活動を通して道徳的価値の認識(再認識)をし、その必要性について気がつく。	◎生き物のお世話をしっかりしたいな。 ◎生き物も一生懸命生きてるのだね。	児童が活動や体験、授業の中に価値の存在を見つけたり、つながりを感じたりする。プログラムのオリエンテーションを行う。
深める	◎道徳的価値につながる価値について道徳の時間や体験活動を通して、その価値の意義や大切さについて考える。	◎生き物の立場に立って世話しないといけないんだ。 ◎僕たちは本当に生き物に優しくしていたのかな。	自分の生活やこれまでの体験をもとに価値の意味についてくわしく考えさせる。
創る	◎実践化につなげていく。そのために今までの学習や体験などを基に目指す子ども像につなげる道徳的価値について考えたり、体験をしたりする。	◎生き物を大切にしていけるには僕に何ができるかな。 ◎生き物がたくさん住む川をきれいにしていきたいね。	もう一度、同じ価値について学習を行ったり、今までより、さらに高い新しい価値について考えたり体験したりすることで「〇〇していきたい。」という意欲を育てる。

道徳教育においては、前述のように児童の変容を見取ることが課題の1つである。「期待する姿に向けて児童が変わってきたような気がする(感じる)」といった指導者の主観による漠然とした印象による評価ではない。道徳の学習プログラム化の評価として、次の三点に取り組んだ。

- ・行動記録の充実(授業中のワークシート、道徳ノート、行動観察の記録)
- ・シンプトムによる評価

・家庭からのアンケート評価

これらの評価を学習プログラムの途中や最終段階で総合的に判断し、個々の児童の変容から全体の変容の傾向をとらえて指導に生かすようにする。

3. 命を大切にすることを育てる道徳教育のプログラム学習の実際

前述の道徳の学習プログラム化に基づいて第6学年の児童27名に、命のありようを実感・理解した上で、その尊さを感じる（ライブ）道徳教育の学習プログラムを実践した。以下は、学習プログラムとその実践の記録である。

(1) プログラム名「命ってやっぱりすばらしい！」

(2) 本プログラムでの育てたい子ども像

命の不思議さ、偉大さを感じ、すべての命を大切にしようとする子ども

(3) プログラムの設定にあたって

命の大切さについて前学年において総合単元的な道徳学習のユニットを通して考えてきた。人の命の大切さについて考えてきたことで、「命は一つしかない大切なものであり一度きりしかない人生を充実したものになりたい」という考えを書く児童が多く見られていた。しかし、「人の命」という視点に注目してきた点と短い期間に集中してユニットを実施したことから「すべての命のありよう」について、体験を通しての価値の内化はまだ十分ではない。そこで本学習プログラムでは、「命は大切である」ということについて、実際に命に触れる体験活動を通じて実感させるようにする。また、時間の流れといった児童にとって想像しにくいものについても、モデルを使って体験活動をするなど実感を伴った理解につながるようにする。道徳の時間や各教科等との連携においては、道徳ノートを使用し、各授業で感じた命の大切さについて記録していく。また、教室には、プログラムで取り上げた学習の様子を掲示していく。この二つの取組において、学習プログラムでの学びを連続させていくようにする。

(4) 学習プログラムでの評価に関わって

学習プログラムの評価の方法と項目は以下の通りとした。

①児童の道徳ノート、ワークシート、行動の記録

②シンプトムによる評価

【学校生活において】

- ・命に関わる話題のときに真剣に話を聞こうとする。
- ・命についての視点を持った日記を書いたり、発言をしたりする。（命をいただく、死なせたくない、大切にしたい、不思議だ、一つしかない）
- ・目に付いた生き物について優しくかかわろうとする。
- ・生き物を飼うことに対して自分なりの考えを持つ。
- ・自分の生まれる前のことに興味をもっているような、記述・発言をする。
- ・水やりに行くことを面倒くさがらなくなる。
- ・積極的に生き物に関わろうとする。

【地域・家庭において】

- ・家庭で命についての発言をする。
- ・動植物の世話を一生懸命しようとする姿が見られる。

③児童アンケートの実施

- ・インゲンマメの世話をしたか。
- ・生きものの世話をしたか。
- ・普段の生活で生き物の命を大切にしようとする行動を取ったか。
- ・命について考えることがあったか。

④保護者へのアンケートの実施

- ・家で生きものの世話を子どもはしているか。
- ・「命の大切さ・尊さ、人生の大切さ」の考えについて子どもは話したり、考えたりしているか。
- ・お子さんを見ていて命を大切にしようとしていると感じることがあるか。

(5) プログラム構想図

学習のプログラムで実施するライフタイムや各教科等のねらい、目指す児童の姿（学習後の思い）、それぞれの学習のつながりについて示し、児童の意識の焦点化がイメージできる図に表した。（図1）

(6) プログラムを終えて

このプログラムを終えての評価は以下の通りである。

①児童の道徳ノート、ワークシート、行動の記録

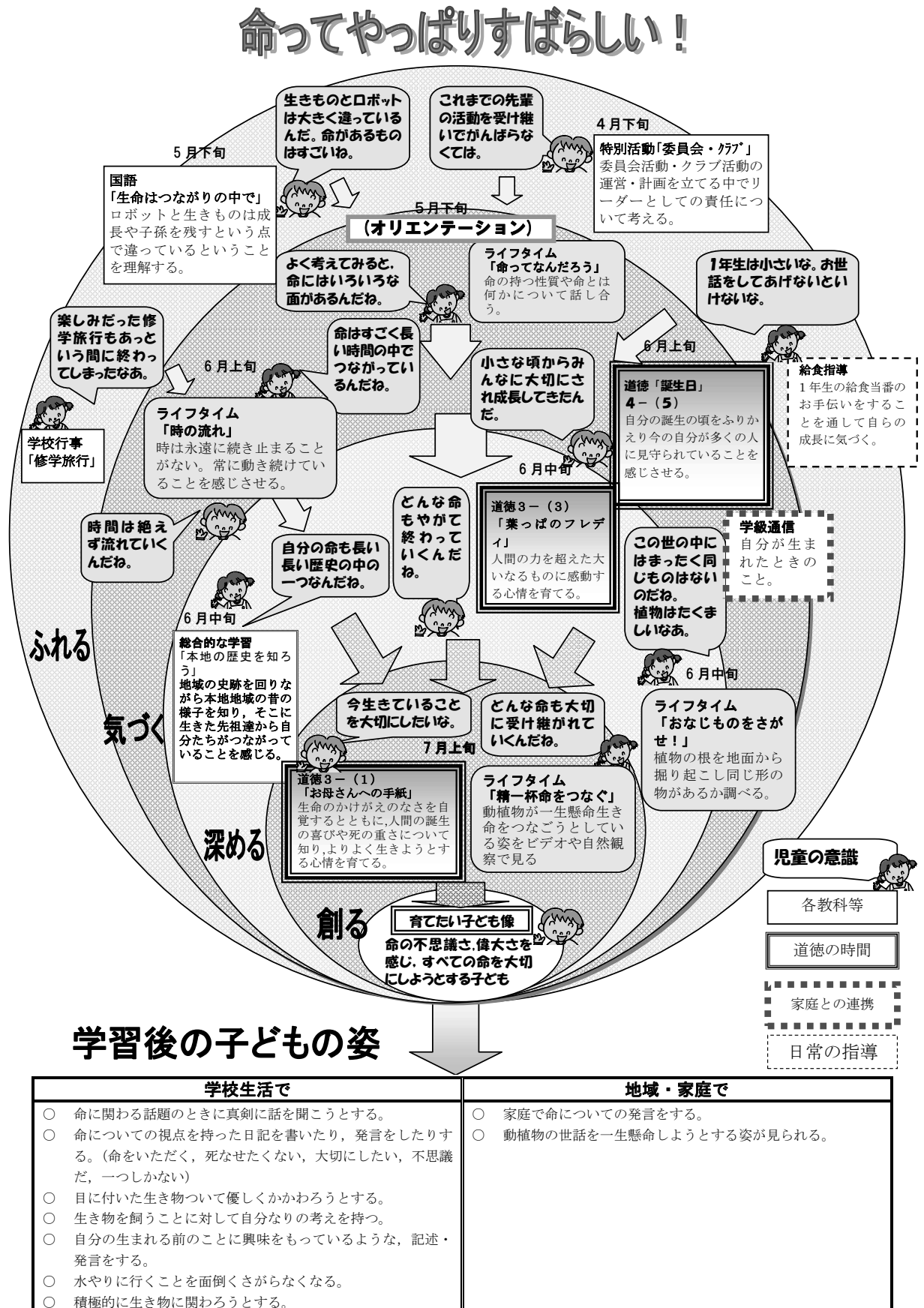
道徳ノートに書かれた内容を表にし、命についての記述についてまとめた。プログラム学習を始めた最初の10日間では、命のことに関する記述をした児童は平均7.6人であったのに対し、終わりの10日間では、16.9人となっていた。

また、最初の記述では、命を大きくとらえ、「地球には…」「山には…」などという大きな視点から見つめていた児童が多かった。しかし、後半になると身近なものや虫などの小さいものから、命があること不思議さを見つけ、命のありようについて捉えている記述がみられた。（17名が該当）

②シンプトムによる評価

プログラム学習前に見られたシンプトムの平均は、13項目中の2.0項目であった。一方、学習後の平均は8.4項目となった。すべての児童によりよい変容が見られたが、22名が5つ以上の変容を示した。一方、4名については、児童は大きな変容も見られず、13項目のうち5項目未満となった。

図1 プログラム構想図(3)



(7) 学習の実際

プログラムの各段階での学習の概要と児童の様子は表2のとおりである。

表2 プログラム名「命ってやっぱりすばらしい！」の学習の概要と児童の様子

「ふれる」段階 自分の成長や5年生の学習を振り返り、命への関心を高める段階	
国語 「生命はつながりの中で」	ロボットと生きものは成長や子孫を残すという点で違っているということを読み取ったり、命のつながりについて筆者の思いが書かれた段落を暗唱したりする。
委員会・クラブ活動	委員会活動・クラブ活動の運営・計画を立てる中でリーダーとしての責任について考え、最高学年になった自分を見つめさせる。
給食指導 自らの成長に気付かせる。	1年生の給食当番のお手伝いを通して、1年生の頃と今の自分を比べさせ、自らの成長の様子について振り返らせる。
理科 (学習の準備)	インゲン豆の種を植えるにあたり同じ模様の種がないか調べ、一つとして同じ種がないことを実感させる。
「気づく」段階 命の様々な面を確認し、自分の命の成長と時間の流れの関係を感ずる段階	
ライフタイム 「命ってなんだろう？」	命とはどういうものかを話し合う。（「1つしかない」「生きているものは必ず持っている。」「親から受けつた宝」「死んだらなくなる」「もどらない」などが出た。）プログラムのオリエンテーションとして「これから命についてもっと考えたり感じたりしていこう」という学習のめあてを示し、自分たちが命について知らないことがたくさんあるということを感じさせプログラムを学習していくことへの意欲を持たせる。
道徳の時間 「誕生日」 4－（5）	反抗期の少年が祖父母から自分の生まれたときの父母の様子を聞き、自分の命がいかに大切にされてきたかを考えるという内容の資料を用いて「命が誕生したときの家族の気持ちを考えさせ、命が生まれる喜び」を感じさせる。参観日に実施し、我が子が誕生した時の気持ちを保護者に話してもらった。授業後には、家庭で自分の誕生の時のことについて話を聞いてくる活動を設定した。「生まれてくることができてよかったです。」「産んでくれてありがとう。親に心配をかけたくない」という感想を18名が持っていた。保護者に学習プログラムのねらいを知らせた。
ライフタイム 「時の流れ」	「時の長さ」について体験活動を通して、時間の大きな流れを越えて、多くの命がつながって自分までたどり着いていることに気がつかせる。体験活動として、10年を1mmとし、10万年（10m）のテープをもって校舎のまわりを歩かせた。人類の祖先といわれる霊長類が生まれた2400万年前までさかのぼるには2.4kmが必要となる。「命はずっとつながってきたのだ」「自分の命は短いな」という感想を持っていった。
「深める」段階 命の個性や有限性について感ずる段階	
総合的な学習の時間 「本地の歴史を知ろう」	本地地区の歴史について老人クラブの方と一緒にフィールドワークを行った。地域の史跡を回りながら昔の様子を知り、先祖達と自分が同じ場所で生活していること、そしてつながっていることを感じる。ライフタイム「時の流れ」と重ね合わせて「僕も本地で生きていきたい」という感想があった。
道徳の時間 「葉っぱのフレディ」 3－（3）	「命は時の中で生まれそして死にゆくものである」ことについて資料を通して考えさせ、命の有限性について感ずさせた。「人もいつか死ななくてはいけない。」「フレディはしっかりと自分の役目を果たしたから満足したのだろう」「私もがんばって生きていかなければいけない」という意見が出た。
ライフタイムで「同じものをさがそう！」見、同じ	校庭にある草の根をそのままの姿で掘り起こすことをした。掘り起こした草の根を比べてみて同じように見えても一本一本違うということや、堅い土に中にでも、しっかりと根をはやしているという感想をもった。植物の命のたくましさや、命一つ一つの個性を感じていた。
この段階になり、児童は身の回りの命について考えをめぐらすようになってきた。道徳ノートには、身の回りの生き物（蚊やアリ、魚、ツバメ、畑の野菜、植物など）についての記述が増えてきた。「命のありよう」について感じ始めている児童の様子を見ることができた。	
「創る」段階 命を大切にすること、よりよく生きていくことの大切さを考える段階	
ライフタイム 「精一杯命をつなぐ」	ライフタイムでは、ビデオや自然観察を行い、命は限りがあるからこそ、周りにある生きものたちは命をつなごうとしているということを感じさせる予定であった。しかし、巣から落ちていた燕の雛の世話をライフタイムとした。雛の一生懸命、生きようとする命にふれ、児童は、餌や飼いを調べたりした。雛に名前をつける際には「名前は1つの命に1つだから、しっかりと全員が考えるべきだ」という発言も聞かれた。結局、ツバメの雛は死んでしまったが、道徳ノートには、命を育てることの難しさ、死についての悲しみなど、学んだことがたくさん書かれていた。
道徳の時間 「お母さんへの手紙」 3－（2）	病に負けず前向きに生きようとした女の子の生き方を通して、希望を持って生きるすばらしさについて考えた。「一生懸命よりよく生きたい」「夢や希望を持ちたい」「どんなときでも前向きに生きたい」「死は必ず来るものだからそれまでの時間を大切にそして、強く生きていきたい」ということが書かれていた。
この段階では、これまで畑の水遣り等の動植物の世話をすることが毎日行われることが当然になってきていた。	

③児童アンケート

学習プログラム実施後に行った児童アンケートの結果は以下の通りである。

	よくした	だいたいした	あまりしなかった	全くしなかった
インゲンマメの世話をしたか。	52%	37%	11%	0%
生きものの世話をしたか。	37%	52%	11%	0%
普通の生活で生き物の命を大切にしようとする行動を取ったか。	44%	48%	7%	0%
命について考えることがありましたか。	52%	48%	0%	0%

肯定的な回答が多くしめ、学習プログラムが効果的であったことが分かる。また、インゲンマメの世話を「よくした」という回答が、生き物の世話を「よくした」に比べて高い。インゲンマメは「ふれる段階」の理科の学習で、種を見比べて、同じものはないという活動をしたあと植えたものである。命と大きくくるとも、自分とのかかわりや他との違いを認識したものについては愛着が湧き、より積極的なかかわりをしている。

④保護者へのアンケート

学級通信にて児童の変容の様子をアンケート調査した以下はその結果である。

- ・「子どもが家庭で生き物の世話をする」66%
(以前からしている 12%を含む)。
- ・「命の大切さについてよく話したり、考えたりする」78%
(以前からしている 11%を含む)
- ・「命を大切にしようとする姿が見られる」89%
(以前からしている 15%を含む)

これらの結果から、この道徳の学習プログラムを通して、児童は命の持つありようを感じ、命を大切にしようとする心情・意欲を持つようになってきたと考える。

5 おわりに

道徳教育の課題をもとに、道徳時間と全教育活動で行う道徳教育の連携を生かした学習のプログラムの開発及び児童の道徳性を高める有効性について述べてきた。

体験活動を含む各教科等の教育活動において、指導者がどのような道徳性を育てていくかを意識して指導することで、児童は、道徳的な価値について考える視点を持つことができる。さらに道徳の時間との連携を図ることで、児童の視点はより明確になる。また、道徳の時間で深めた後、各教科等の授業の中で道徳的な価値を意識

させることで、児童の道徳性はさらに高まっていくといえる。道徳の時間と、学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の効果をより高めるために、多様な教育活動を特定の道徳的価値と関連づけ、流れをプログラム化することは有効であると言える。

しかし、ここでは命を大切にすることを育てる学習のプログラムの一部をモデルとして提示したにすぎない。人間教育に資する道徳教育として、児童が直接感じることを、ふと立ち止まって考えることを関連付けて道徳性を高めていくプログラムを、別の道徳的な価値や別学年においても作成し、その実践を通して有効性をさらに検討していきたい。

引用文献

- (1) 文部科学省、『小学校学習指導要領解説 道徳編』 pp.23,2008
- (2) 北広島町立本地小学校『本地小学校の道徳教育(研究紀要)』 pp.10,2006
- (3) 北広島町立本地小学校,前掲書 (2) pp.78

参考文献

- (1) 文部科学省、『小学校学習指導要領解説 道徳編』,2008
- (2) 新川靖「命を大切に子どもを育てる—道徳学習プログラムを通して—」梶田叡一『教育フォーラム』金子書房,2006